

知的障害者へのスポーツ支援と社会的価値の創造

佐藤 充 宏

Assistance of Sports for Persons with Developmental Disabilities as Enhancement of their Socially Valued Means Mitsuhiro SATO

Abstract: The purpose of this paper is to investigate changes of leisure abilities to the participants who play sports for persons with developmental disabilities in Special Olympics Nippon/Tokushima (SONT). The participants are called 'athlete' in SONT and acquire the new social roles in their group. Wolfensberger (1994) suggested to the necessity of better services for socially devalued people. In order to enhance to the socially values of persons with developmental disabilities, the following results are obtained; 1) the coach/volunteer stand in a row to athletes, 2) athletes become to learned the leisure skills by communicating with the coach/volunteer, 3) the sport service in SONT should be used the fundamental action unit (athlete-coach/volunteer) to promote their socially valued means.

KEYWORD: Special Olympics, sports for persons with developmental disabilities, social role valorization, leisure ability

1. 問題の所在

わが国の障害者施策は、すべてのライフステージの段階において全人間的復権をめざす「リハビリテーション」の理念と、障害を持たないものと同様に生活できる社会をめざす「ノーマライゼーション」の理念のもと、完全参加と平等の目標に向けて推し進められてきた。1993年からは新長期計画に基づき障害者対策を、福祉、生活環境、スポーツ・レクリエーション及び文化、保健医療、雇用就業、教育育成、啓発広報、国際協力の8領域に分け、新たな時代のニーズに対応しようとしている¹⁵⁾。その中でスポーツ、レクリエーション及び文化が一領域として明確に定義されていることは注目に値する。芳賀 (1998) は、「レクリエーションという人工的・意図的・計画的な環境は、障害者・精神疾患患者・高齢者に対して非日常的な空間と時間を提供するものであり、日常生活においては見えなかった長所や残存能力が見えてくる環境を提供してくれる。医療・福祉領域のレクリエーションは、行動の変容や機能の改善を促す自信、意欲、生きがい、楽しみ、機能の向上といった様々な要素が引き出される」とし、障害者対策として期待されるスポーツやレクリエーションについて説明している¹⁶⁾。医療・福祉施設ではリハビリテーションのひとつとしてレクリエーション活動が積極的に取り入れられてきた理由がここにある。その上、身体的効果だけでなく精神的・知的効果、社会化への効果、ひいてはQOL (生活の質) の向上へもつながるなど、ライフスタイルの改善を合わせ持つ有効な療法として医療・福祉の現場では大きな評価を受けるようになった。

しかし、障害のある人にとってのスポーツ・レクリエーション活動は、いまだ医療・福祉・教育といった制度的支援サービスの中で取り扱われているプログラムやイベントものを中心

である。これらのスポーツやレクリエーションはその運動効果を期待される療法的なものであり、本来のスポーツやレクリエーション活動の持つ自由裁量的で自己決定できる活動としては程遠いものである。地域スポーツの文化的発展を考える意味でも、地域におけるこのような障害者へのスポーツ支援活動は重要な課題となっている。

実際、リハビリテーションとして実施させられてきたスポーツ活動を、自己決定のもとに自分の楽しみのために行えるようにするには、スポーツに対する価値の転換や余暇時間の理解、活動のための資源を身につける必要がある⁸⁾。しかし現時点では、医療リハビリテーションの分野では機能回復が主目的であり、障害のある人のその後の生活までは支援できていない。また逆に地域でのスポーツ活動では、競技性の強いものが中心となってしまう、誰もが気軽に参加できる活動は少ない。そのため、医療・福祉施設で評価を受けているレクリエーション活動が、障害のある人にとって日常的なスポーツ活動にはつながっていない場合がほとんどである。この現状に対して問題視しなければならないのは、地域における日常的な知的障害者のスポーツ活動への支援の不十分さである。地域スポーツをひとつの市民文化として質的に高めていくためにも、これら障害のある人のスポーツ活動がサポートできる支援システムを育成していくことが重要な課題となっている。

そこで本研究では、知的障害者に対するスポーツ支援を行っているスポーツボランティア団体であるスペシャルオリンピックス日本・徳島（以下、SON徳島と略す）を事例的に取り上げる。このボランティア団体は地域における知的障害者へのスポーツ支援を通してノーマライゼーションをめざす世界的な組織の徳島支部である。このSON徳島の活動を、知的障害者へのひとつのスポーツ支援活動として捉え、その活動が参加者へのレジャー教育機能を通じて如何に社会的価値を高めることに貢献しているのかについて、Social Role Valorization（以下、SRVと略す）理論を援用して検討することが目的である。

2. 研究方法

1) SRV 理論とレジャー教育

ノーマライゼーション視点からの障害者へのサービスの質的向上に大きな影響を与えているのが、WolfensbergerのSRV理念である。ノーマライゼーションをただの目標としてだけでなく、手段としても用いるために、「可能な限り文化的に価値のある手段による、人々、ことに価値の危険に瀕している者たちのために、価値のある社会的な役割の可能化、確率、増進、維持、ないし防衛」について具体的に理論構築されたものである¹²⁾。彼は、ノーマライゼーションを対人処遇（human management）の原理として体系的に理論化しようとし「逸脱」という概念に着目する。ノーマライゼーションは手段と結果の両方を意味し、結果についての部分は、障害者の行動や特徴を文化的にノーマライズすることによって、障害者が逸脱者と見られる状態を解消しようとするものであるとした²⁾。SRV理論は、生活の行為や特徴までノーマルにしていこうというために、ノーマルになりえない重度障害者の否定にも繋がるのではないかとの批判も少なくない。しかし、この理論のすばらしいところはノーマライジングする領域を具体的に提示しているところである。特に、価値を引き下げられた人の社会的価

値の獲得には、適応力とイメージの増進が重要な課題として示されている。

スポーツ社会学の立場から障害のある人のスポーツ活動を考える場合、私たち自身がその目で見える障害児の障害の特徴が社会的に存在していることを出発点として考えなければならない。その意味では彼らの地域スポーツ活動における社会的不利益が一義的な内容をもつことになる。その中で運動障害やコミュニケーション障害を理解しなければならない。通常の生活におけるスポーツ活動は Wolfensberger 流に考えればノーマルな行動になる。障害のある人にとってレジャー、スポーツ、レクリエーションの分野で社会的価値の高い役割は、運動家、選手、コーチ、スポーツファンなどがある。社会的価値を引き下げられた人、あるいはその危険性に瀕している人にとって、このようなスポーツ場面において肯定的な価値をもつ役割を教わることで、他の価値ある役割の喪失を防御することができるのである。この意味で、レジャー教育は重要なノーマライジング・プログラムであることが指摘できよう。

障害のあるなしに関わらず、ビジネスやメディアによって肥大化するスポーツ文化を、良い部分も悪い部分も含めて通常の行為として行えることが重要である。これがスポーツのノーマラゼーションとなる。障害のある人の生活条件の問題だけでなく、行動や特徴を通常の状態に近づけると考える点に SRV 理論を援用する意義がある。

一般に障害のある人の行動や特徴を通常の状態に近づけようと働きかける場合、教育の重要性が指摘されている。例えば、セラピューティック・レクリエーション (Therapeutic Recreation) のように、治療とレクリエーションの双方の機能を併せ持つプログラムの場合も、徐々に参加者の主体性や自由度を認めながらレクリエーション自立へと展開する教育的支援が重要な鍵となっているのである¹⁰⁾。障害のある人にとって適切なレジャー・ライフスタイルを作り出すためには、幅広い知識やスキルを習得しなければならない。障害のある人へのレジャー支援は教育的要素を含まざるを得ないのである。そこで本研究においても、レジャー教育機能の側面から参加者の社会的価値を理解するために、ピーターソンとガン (1984) のレジャー教育モデルを根幹に位置づけ分析の枠組みとする (図 1)⁹⁾。

I. レジャーへの理解 <ul style="list-style-type: none"> ・レジャーの知識 ・自己を認識すること ・レジャーと遊びの態度 ・参加と決定のスキル 	II. 対人関係のスキル <ul style="list-style-type: none"> ・2人 (1対1) での ・小グループでの ・大きな集団での <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; text-align: center;">協 力 と 競 争</div>
IV. レジャー資源 <ul style="list-style-type: none"> ・活動の機会 ・個人的な資源 ・家族や家庭の資源 ・コミュニティの資源 ・県や国の資源 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; text-align: center;">知 識 と 活 用</div>	III. レジャー活動のスキル <ul style="list-style-type: none"> ・伝統的なレジャー活動 スポーツ・ダンス・音楽・ゲームなど ・伝統的ではないレジャー活動 人付き合い、観戦観賞、フィットネス クッキング、旅行、パーティなど

図 1 ピーターソン&ガンのレジャー教育モデル⁹⁾

このレジャー教育モデルでは、ノーマライゼーションを念頭にレジャーを活用するため4つの最低限必要な要素が示されている。第一の要素はレジャーへの理解である。レジャー・ライフスタイルを理解する上で大切なことはレジャーもしくはレジャー効果についての知識を深めることである。レジャーそのものの理解、自分自身を知ること、レジャーや遊びにおいて自分にとって何が大切なことなのか明確に認識すること、意思決定や課題解決の能力が求められる。第二の要素は対人関係のスキルである。レジャー活動に期待されるひとつでもあるが人間関係が広がり深まることに意義がある。1対1という関係からグループ、大きな集団まで、その関わり方からレジャーを学ぶことが重要である。1対1については、障害のある人にとってガイドやサポーターといった存在が重要なスポーツ活動ユニットであり、この関係をグループへと発展させていくことが基本となる。第三の要素はレジャー活動のスキルである。伝統的なレジャーとしてのスポーツやダンスなどがあげられるが、それ以外にもレジャーとして観戦、フィットネス、旅行なども含まれる。個人の状態に合わせて幅広く活動が選択できることが大切である。第四の要素はレジャー資源である。レジャー資源としては、活動の機会や家族の資源、地域コミュニティの資源、県や国の資源があげられている⁹⁾。

このピーターソンとガンのレジャー教育モデルにおける4要素はスペシャルオリンピックスの活動の機能を評価する基準を提示してくれる。SRV理論では、人のイメージと適応力の間にフィードバックループを形成するが、人と他人との間に引き起こされるイメージや適応力は当然このレジャー活動を通して即時的に生産され消費されることになる。社会的ステイグマを付与された知的障害のある人にとって、アスリートという新たな社会的役割を獲得することで、新たな適応力を発揮し、それを他者がその肯定的イメージを信じれば信じるほど、活動の機会や期待が増加していくと考えられる。

2) スペシャルオリンピックス日本・徳島のスポーツ支援活動

以前から知的障害児の保護者の間で、我が子にスポーツの機会を与えてやりたいという声や、また、養護学校の生徒からバスケットボール部を作ってほしいという要望が始めた。しかし指導者や活動時間等の問題で学校側では、こうした機会を提供できない状態であった。そこで、学校のない土曜日曜日にスポーツをするプログラムを地域レベルで提供しようと1997年にSON徳島が設立した。

SON徳島は日本で11番目に発足した地区組織であり、徳島市を活動の拠点に土曜日・日曜日にアスリート（知的障害のある人）、コーチ、ボランティア、ファミリー（保護者）合わせて約40名程度で活動を行っている。プログラムは週1回2時間の8週間が1単位で、種目は水泳・陸上・バスケットボール・バレーボール・卓球・ボウリング・サッカー・体操が行われている。これらのスポーツプログラムの他に、キャンプや合宿・釣り・パーティなども組み込まれている。

SON徳島の活動の場は、アスリート、コーチ・ボランティア、ファミリーの三者が、プログラムや場だけではなく、文化を共有する場となっている。大きな目標として次の四つを掲げている。①アスリートの全人的・社会的成長を助ける手段として、年間を通じてのトレーニングプログラムと競技会を、市民ボランティアの手により提供する。②SOスポーツ活動

は、アスリートが挑戦への勇気を培い、成果としての技術を公に示し、友情と信頼の尊さを学び、よって一人の価値ある人間として自信と自覚を養えるように配慮される。③スポーツ活動を通じて、各アスリートの自立心、自尊心の向上を促し、アスリート自らの意志による本活動はもとより社会参加をも支援する。④参加ボランティアは、ノーマライゼーション精神について本活動を通じて学び実践することにより、アスリートにとってより良い社会の実現を支援することにある。

3) 面接調査

調査時期：1999年9月18日から12月19日にかけてインタビューによる面接調査を行った。プログラムの合間にファミリーの方に主旨説明を簡単に行い、その後はあらかじめ設定した項目について質問を行った。面接の内容は全て非調査者の許可を得て、テープレコーダーにより録音した。

調査対象：SON徳島に参加しているアスリートの母親7人。

調査項目：対人関係のスキル（1対1での人間関係・小集団での人間関係・大きな集団での人間関係）、レジャー資源（活動の機会・コミュニティ資源・家族や家庭での資源）、レジャー活動のスキル（レジャー活動の内容）、SON徳島に参加するようになったきっかけ、これまでのレジャー・レクリエーション歴の5項目である。

表1 対象者の属性

	年	性	職業	障害名	参加時期
A	17	M	学生	自閉症	98年
B	13	M	学生	自閉症	99年6月
C	—	M	施設通所	ダウン症	98年1月
D	15	M	学生	自閉症	97年7月
E	18	M	学生	ダウン症	99年8月
F	9	M	学生	ダウン症	99年1月
G	20	M	施設通所	筋緊張性筋ジス	97年10月

4) 参与観察調査

1999.7から2000.1までレジャー教育の場としてどのように機能しているのかについて、実際の活動に参加し、参与観察を行う。

事例：第2回サッカープログラム 3週目

調査日時：2000年1月23日（日）14：00-16：00

調査場所：徳島市B&G海洋センター体育館

参加者：アスリート18名、ファミリー 11名、コーチ・ボランティア 14名

調査方法：観察参与によるフィールドノーツ分析法

手続き：1999年6月から2000年1月までの卓球、陸上競技、バスケット、サッカーのプログラムに参加観察記録し、2000年1月のサッカープログラムを事例として取り上げた。

3. 結果及び考察

1) 面接調査によるライフヒストリー分析

(1) 事例A 自閉症 17歳 男性

幼い頃に水に触れるのが良いということを知り、水泳をさせ始めた。これをきっかけに、太らせないた

めにも、障害のある人を対象としたスポーツプログラムを中心に、さまざまなスポーツに参加させてきた。SON 徳島の活動に参加するようになったのは、先に参加をしていたファミリーの方に勧められたのがきっかけである。最初 SON 徳島の活動を見学した時、雰囲気的にアスリートを安心して参加させられる場所だと感じた。また、母親自身も楽しんで参加できそうだと感じ、SON 徳島の活動に参加するようになった。今現在まで、SON 徳島で行われているスポーツプログラムを始めとして、キャンプや合宿といったイベント的なプログラムなど、SON 徳島での活動にはほとんどすべて参加している。また、1999年の6月26日から7月4日までアメリカのノースキャロライナで行われた世界大会に参加し、水泳で素晴らしい記録を修めた。SON 徳島参加をきっかけとして、様々な体験の機会に恵まれてきた。

①レジャーへの理解：幼い頃から積極的にレジャー活動を行うということは少なかった。太らせないためにスポーツクラブに通わせる程度であった。特に嫌がるという様子もなく、集団に合わせながらスポーツを行っていた。しかし、SON 徳島に参加するようになってからは、SON 徳島以外の活動には興味を示さなくなり、行きたがらない。レジャー活動のすべてが SON 徳島の活動であり、SON 徳島を最も楽しみとしている。

②対人関係のスキル：自閉症特有で対人関係が全くなかったのが、世界大会に水泳で参加することが決定してから、コーチと1対1で練習をするようになってからコーチの存在を認めるようになった。コーチもアスリートも誰もみな全く同じだったのが、コーチをひとりの人間として特別な存在として意識するようになった。これを境として、人間関係を意識するようになってきた。

集団での対人関係としては、わがままな面もまだまだ見られるがより一層協調性が強くなってきたように思う。また集団に協調にしながらも、自分一人でもできる、自分一人でもやりたいといった自己主張をする面も増えてきている。年齢の面もあると思うが、親が近くにいるというのを嫌がる。その点 SON 徳島では、ファミリーとアスリートの関係を崩し、ファミリーから離すようにしている。これがアスリートの自立を助長し、また居心地が良くしている。

③レジャー活動のスキル：SON 徳島参加前までは、さまざまなスポーツを経験させてきていた。しかし、その活動は教室やスポーツクラブが中心であった。SON 徳島に参加するようになってからは、レジャー活動に対してアスリートが明確に自分の意思を示すようになり、SON 徳島の活動、もしくは SON 徳島の仲間との活動以外には興味を示さなくなった。今は毎週の SON 徳島を楽しみとし、普段はパソコンやゲームをして余暇を過ごしている。

④レジャー資源：学校入学前；3歳くらいから、ハッピーの水泳教室に参加⇒小学校時代；HDAというクラブに通う⇒中学時代；学校で水泳クラブに所属、HDAというクラブに通う（中学2年まで）⇒現在；SON 徳島の活動、SON 徳島の仲間とのレジャー（旅行・スケート・キャンプ等）

週に一度は SON 徳島の活動があり、さまざまなプログラムが組まれているので、アスリートも嫌がることなく活動に参加している。SON 徳島に参加することで、レジャー活動の場所・内容を提供してくれ、そしてそこには大勢の仲間が存在する。仲間という資源が、SON 徳島の活動の場以外でも大きなレジャーの資源となり、それとともに活動の機会を提供してくれる存在ともなっている。SON 徳島の場をきっかけに、日常のレジャー活動が広がりを見せている。

（2）事例B （自閉症 男性 13歳 1999年6月から SON 徳島に参加）

基本的に家族みんなが、体を動かすことが好きなので、幼い頃から自閉症児を対象としたスポーツプログラムやイベントには数多く参加してきた。SON 徳島の活動に参加するようになったのは、先に参加して

いたファミリーの誘いがきっかけである。SON 徳島の活動を見学した時、SON 徳島の雰囲気を感じて入り参加を決めた。アスリートにコーチ・ボランティアがべったりとついていてくれるわけでもなく、全くほったらかしということでもない。ある程度自由にさせてくれるこの距離感、他者との関わり方が良いと感じた。

1999年6月からの参加で、まだ日が浅く、参加したプログラムも数少ない。

①レジャーへの理解：さまざまなスポーツが体験できて喜んでいるようである。レジャー活動に対する意思を示すことは少ないが、「明日は～行く、昼から～行く」ということを伝えておくと、宿題などは済ませている。楽しみにしているようである。SON 徳島の活動によって、休日の過ごし方に目的ができ、アスリートにとってもファミリーにとっても、メリハリがついた。SON 徳島で卓球を経験してからは卓球台を見ると、卓球をしようということを言うようになった。

②対人関係のスキル：自閉症であり、SON 徳島に参加するようになってまだ日が浅いということもあり、対人関係については、それ程大きな変化は見られない。聞かれたことに対しては答えるが、自分の方から積極的に話しかけていくというような場面は見られない。集団での協調性も、集団に合わせるということではあるが、そこで自己主張をするというようなことはない。しかし回を重ねるにつれて、コーチ・アスリート・ファミリーの前で、大きな声ではっきりと自分の名前を言うことができるようになってきた。

③レジャー活動のスキル：SON 徳島に参加して経験したプログラムが、まだ卓球と陸上だけなのであるが、卓球台を目にすると、「卓球やろう」という意思を示すようになった。SON 徳島に参加することで新しい活動を経験でき、卓球というスポーツを覚え、身につけることができた。そしてそれが、日常のレジャー活動の幅の広がりにもつながった。

④レジャー資源：学校入学前；家族と一緒に、砂場遊び・石投げをしたり、走ったりして遊ぶ。長期休暇には、家族で旅行に出掛ける。⇒小学校時代；2年の頃から、YMCAの自閉症児のプログラム（あすなろクラブ）に参加、体操・プール・デーキャンプ、体操教室に通う。自閉症児親の会に参加一年1回牟岐で2泊3日のキャンプ。個人的には、時々プールに行く。⇒現在；SON 徳島、あすなろクラブ、自閉症児親の会。個人的にはプール、旅行に出掛ける。

体を動かすことが好きなので、さまざまな活動が経験できる SON 徳島の活動は、面白く、気に入っているようである。週に一度 SON 徳島の時間として決まっていることで、活動にも参加しやすいようだ。また、卓球という新しいスポーツを経験したことで、アスリート個人に新しいレジャー資源が身に付いたと考えられる。ファミリーも一緒に活動に参加できる SON 徳島の場がアスリートにとってもファミリーにとっても、大きなレジャー活動の機会となっている。

（3）事例C （ダウン症 男性 1998年から SON 徳島に参加）

知的障害のある人を対象とした活動プログラムに関心をもっていた。SO日本が設立された年ぐらいにダウン症の会の大会で熊本へ行った時に、SONの資料を目にしたのがSONを知ったきっかけである。その時にその活動に興味を持ち、徳島から熊本のSONに入ろうかと思うくらいであった。SON 徳島が設立されるのを心待ちにしていた。SON 徳島が設立されたというのを知ったのが遅く、設立して半年後くらいに入会した。SON 徳島で行われている活動には、参加できる限り全てに参加している。毎週定期的に行われているプログラムを始めとして、キャンプや合宿といったイベント的なプログラムなどにも積極的に参加している。

①レジャーへの理解：レジャー活動の計画に関しては、アスリート本人の意思を最優先としている。選択肢

をいくつか用意しておいて、最終決定はアスリートに任せている。体を動かすことが好きで、それ以上に人との交流を好むため、SON 徳島での人との関わりはアスリートの日常生活にとって新鮮な場となっている。普段の生活での集団とは違う、全く別の集団と接することができることの楽しさが、アスリートの SON 徳島の魅力となっている。その魅力によって、アスリートは日常生活の中で SON 徳島の活動を何よりも楽しみとし、何よりも重点を置いている活動となっている。

②対人関係のスキル：SON 徳島では、コーチ・ボランティアがアスリートに対等な立場で、指導者としてではなく、遊び友達のように接してくれる。また、アスリートを一人前として見てくれる。今までは、病院や学校・施設においては生徒と先生という関係であり、先生は常に上からの目線で生徒と接していた。上から押さえつけるような目線、態度であり、アスリートは大人に対して構えてしまう傾向があった。その状況が一変したことで、SON 徳島ではアスリートは伸び伸びとしている。個人個人を評価してくれるので、自分に自信がついたようである。SON 徳島の時間が一番楽しそうである。表情も生き生きとしている。コーチやボランティアとの関係は、新しい友達が大量できたような感じで、嬉しくて仕方ないといった感じである。自分を受け入れてくれているということを感じ取っているようだ。

③レジャー活動のスキル：SON 徳島参加以前から、家族と一緒に定期的にスポーツやレクリエーションを行っていた。以前からボウリングを楽しんでいたのであるが、SON 徳島のプログラムの中にボウリングがあり、それ以来より一層積極的にボウリング場に通うようになった。少しでも良いスコアを出すために練習をし、そのスコアを毎回ノートにつけていっている。ノートにスコアをつけるという行為も楽しんでいるようだ。

④レジャー活動：学校入学前；特別な遊び・スポーツをする機会がなかった。⇒小学校時代；付属養護学校、サークル・運動部的なものはなく、特別なことはしていない。⇒中学時代；付属養護学校。⇒高校時代；付属養護学校。⇒現在；ダウン症の会“小鳩会”の活動に参加。週一回家族と一緒にボウリングに出掛ける。バドミントン・キャッチボールなど、時間があれば家族と一緒に近くの公園で楽しんでいる。（定期的なものではない）

日常生活とは違う集団の中で活動でき、SON 徳島という普段とは全く別の立場の人と交流できる機会があることを喜んでいる。またコーチ・ボランティアとの出会い、そして新しい人間関係の構築という、人的資源の獲得の場としても機能しているようである。

このように活動の機会と人的資源を提供してくれる場として、SON 徳島が機能しているのだ。普段とは違う空間で、普段とは違う人たちと接点を持つことができるという、非日常性がアスリートにとっては新鮮なのだろう。

（4）事例D （自閉症 男性 15 歳 1997 年 7 月くらいから参加）

運動は何かさせてやりたいと考えていたが、普通のスポーツクラブでは技術的にも体力的にも無理であり、団体行動にも不安があり、何もしていない状況であった。しかし、何もしなければ、人間関係が養護学校の子だけに限定されてしまう。友達関係が狭くなってしまうことが心配で、学校以外の運動クラブに入りたいと考えていた。その時に学校の方から SON 徳島の案内をもらい、知的障害のある人を対象としたプログラムであるということで、参加を決めた。日常のスポーツプログラムだけでなく、キャンプや宿泊といったイベント的なプログラムにも、参加可能な限り全てに参加している。今では、アスリートだけでなく、ファミリーもさまざまな体験のできる SON 徳島の活動にはまっているという状況である。

①レジャーへの理解：ここ最近までは、心臓の病気のこともあり、運動やスポーツといったものは止められていた。幼い頃から体を動かす機会というと、病院や訓練所で行われるリハビリの一環である訓練的なものであった。そのため、アスリートには運動＝訓練の延長・面白くないものという認識があった。それが、SON 徳島の活動を通して運動＝遊び・楽しいものという認識が変わった。SON 徳島に参加している時のアスリートの表情が最も明るく、楽しそうである。体を動かすことも好きになってきたが、それ以上にコーチやボランティアとの交流を楽しんでいるようだ。アスリートにとってコーチやボランティアは、お兄さんやお姉さんのような存在になっているようである。SON 徳島の活動日を指折り数えて毎日の生活を送っている。

②対人関係のスキル：SON 徳島に参加する前は、接する人という病院や訓練所の先生、学校の先生であった。常に上の立場の人と接し、「これはだめ。あれはだめ。」というように行動を抑制されることが多かった。そのため、自分のしたいことも自由にできず、自然と先生達を敬遠するようになってしまった。先生とは一線を引いてしまっているのである。また、友達とも年齢が上がっていくにつれて、接する機会が少なくなり、自分から輪に入っていこうとすることがなかった。

それが SON 徳島ではコーチやボランティアは、アスリートの遊び友達のような立場であり、一緒にひとつの活動を楽しんでくれる。また、アスリートの意思を尊重し、行動を抑制させるようなことはない。このように今までとは違う人間関係を築くことができ、アスリートは自信をつけたのか、人に自分から積極的に話しかけていくことが増えた。人との交流を好むようになってきた。

③レジャー活動のスキル：SON 徳島に参加したことで、コーチや他のファミリーと出会い、レジャー活動の幅が大きく広がった。SON 徳島の活動以外でも、誘い合いさまざまな活動を行っている。スキーや釣り、スケートなど、SON 徳島参加前では考えられない程の活動を体験できている。自分たちの家族だけでは行きづらいことでも、人が集まると行きやすくなるものである。SON 徳島を通しての人的資源は、レジャー活動の幅を広げてくれたと考えている。コーチ達に教えられる部分も多く、コーチという存在はアスリートだけでなく、ファミリーにも大きな影響を与えている。

また、コーチとメール交換がしたくて、ローマ字を独学で勉強するようになったり、コーチがバイクに乗っているのを見て、自分も免許を取りたいと言うようになったりと、日常生活に刺激を与えてくれた。今は毎日をいきいきと生活している。

④レジャー資源：学校入学前；訓練所で行われる運動訓練的なスポーツ。民間の障害児教育を行っている所での遊び・レクリエーション。⇒小学校時代；訓練所で行われる運動訓練的なスポーツ。家族や友達と、遊園地や季節的なイベントに出掛ける。⇒現在；SON 徳島の活動。SON 徳島の仲間と釣り、スケート、スキー、キャンプなどに出掛ける。

SON 徳島の仲間と出会ったことで、レジャー活動の種類が大幅に広がった。スポーツ・レクリエーションをコーチが経験させてくれることで、アスリートの自信にもつながっているようである。また、アスリートと一緒にファミリーも参加できるので、ファミリーのレジャーの機会ともなり、楽しみを共有しているようである。レジャー活動の機会を提供してくれるだけでなく、レジャーの楽しみ方も教えてくれる。さまざまな活動を体験させてくれる場となっている。これには、コーチという人的資源が大きく影響を与えているように思う。

(5) 事例E (ダウン症 男性 18歳 1999年8月末から参加)

ダウン症の親の会“小鳩会”の会長さんからのすすめで、SON 徳島の活動を知り、参加するようになった。

8月の末に話を聞いて、9月の中旬から本格的に活動に参加するようになる。活動に参加するようになって、まだ日が浅く、これまでに参加したプログラムも陸上プログラム2回程度、そしてバスケットボールプログラムだけである。しかし、アスリートはSON 徳島の活動を楽しんでいるようである。またアスリートだけでなく、ファミリーも一緒に楽しんでいるといった状況である。

①レジャーへの理解：参加のきっかけも、ファミリーが体を動かすことが好きなので、子どもも一緒にといったかんじであった。しかし、SON 徳島の活動を始めとして、レジャー活動に関して、嫌がることはほとんどない。レジャーの計画を伝えておくと、やるべきことは仕上っている。楽しみにしているように思う。体を動かす機会を持てたことも喜んでいるようだが、コーチを始めとして人との関わりも喜んでいるようだ。コミュニケーションも上手くとれている。また、SON 徳島の活動を通して、自分自身を見つめているという部分もあるようだ。SON 徳島がアスリートの中で上手く機能しているように思う。

②対人関係のスキル：今まで学校以外の時間は、常に母親と一緒に行動を共にしていたのが、SON 徳島ではプログラムの間は、コーチがアスリートとファミリーを離してしまう。プログラムの2時間は母親の手から離れて活動を楽しんでいる。これをきっかけとして、自立心が芽生えてきたのか、積極的になった。学校で発表することが多くなり、“自分がする、自分がしたい”といったような自己主張をみんなの前でできるようになったのである。やはり、この変化にはコーチの存在が大きいように思う。自然体でアスリートに接してくれるコーチが、アスリートだけでなくファミリーにも自信をくれるように思う。母親の手から少し離れてしまったアスリートを嬉しく思う反面、悲しくも感じている。

③レジャー活動のスキル：SON 徳島に参加するようになって、身体的にも変化が見られる。動きが機敏になってきた。また、動いているボールをつかめるようになり、とんできたボールを返すことができるようになった。こうした変化が見られたため、卓球をやらせてみると、打ち合いをすることができた。それ以来、なるべく時間をとっては家族と一緒に卓球をするようになった。これもSON 徳島の効果のひとつであると考えている。一緒にできる活動ができたということが、嬉しいようだ。

④レジャー資源：学校入学前；心臓が悪くて、運動らしい運動はできなかった。⇒小学校時代；運動らしい運動はできなかったが、キャンプやバーベキューなどのアウトドア的なものを定期的に行っていた。近くの公園でボール遊びなどをして遊ぶ。⇒中学時代；陶芸教室・習字教室に通う。アウトドア的な活動を月に1度は行っていた。⇒現在；陶芸教室・習字教室。アウトドア的な活動。SON 徳島の活動。卓球。

SON 徳島に参加したことで、身体的に発達し、スポーツ技術も獲得することができた。こうした個人的な資源をアスリートが蓄えることで、SON 徳島以外でのレジャー活動につながったように思う。また、アスリートだけでなくファミリーも一緒に参加者のひとりとして参加できることで、アスリートの新たな面の発見にもつながっていると考えられる。少しの時間でも、アスリートとファミリーが離れることで、両者に良い影響を与えているのである。非日常空間としてのレジャーの場としての機能を上手く果たしているのではない。

(6) 事例F (ダウン症 男性 9歳 1999年1月から参加)

SON 徳島に参加するようになったきっかけは、ダウン症の親の会“小鳩会”の会長さんにすすめられ、SON 徳島の活動を知り、参加するようになった。これまでに参加したプログラムは、サッカー・ソフトバレー・卓球・バスケットボールである。毎回参加できるというわけではないが、できる限り参加している。

①レジャーへの理解：年齢的にもまだ幼いので、ひとつの遊び場といったような認識の程度である。SON

徳島に参加すると、多くの人と接することができるというところに魅力を感じているようだ。また、コーチが常に構ってくれることが嬉しいようである。家ではどうしても家族のみで、多くの人と接する機会はほとんどない。大勢の人がいて、みんなが自分を構ってくれるという点で、SON 徳島の場を喜んでいる。

②対人関係のスキル：基本的に人なつっこい性格であったのだが、SON 徳島の活動に参加するようになって、より一層人なつっこくなってきたようだ。アスリートがまだ幼いということもあり、コーチやボランティアの人たちが常に相手をしてきている。そのため、最近ではわがままにもなってきたが、アスリート自身は嬉しそうである。アスリートにとってコーチやボランティアの人たちは、お兄さんやお姉さんのような存在となっている。

③レジャー活動のスキル：SON 徳島の日常的なスポーツプログラムに参加し、イベント的な活動には参加できていないので、レジャー活動の内容が大幅に変わったということはない。しかし、SON 徳島に参加するようになって、身体的な変化は大きい。体力的に強くなり、元気にもなった。バランス感覚も良くなったように思う。この夏休みに、長い間取れなかった自転車の補助輪が取れたのである。これも SON 徳島の活動のおかげなのかも知れない。補助輪なしで乗れるようになり、毎日嬉しそうに自転車に乗っている。

④レジャー資源：学校入学前；2 歳頃から、ダウン症親の会“小鳩会”、学童保育に参加、キャンプ・スポーツプログラムなど、できる限り参加⇒幼稚園入園前から、週 1 回スイミングスクールに通う。近くの公園で、友達や家族と野球・ドッジボールをして遊ぶ。⇒現在；SON 徳島、小鳩会、学童保育、週 1 回のスイミングスクール、近くの公園で、家族や友達と一緒に遊んでいる。

母親が体を動かすのが好きなので、さまざまな活動にアスリートを連れだしている感じである。しかし家族で動くとなると、活動は限られてしまう。それが、SON 徳島では参加者は年齢層も広く、さまざまな立場の人が集まってきている。そこでは多くの人と接することができ、また人が集まることで初めてできる活動も数多くある。こうした人的な資源を提供してくれる場として、SON 徳島が機能している。また、SON 徳島を通して身体的に発達することで、SON 徳島以外のレジャー活動にもつながっていく。こうしたレジャー資源を個人の中に蓄えるための場としても機能している。

(7) 事例 G (筋緊張性筋ジストロフィー 男性 20 歳 1997 年 10 月頃から参加)

子どもの友達が先に参加していて、紹介されたのが SON 徳島への参加のきっかけである。筋緊張性筋ジストロフィーのため、技術的にのびずというよりも、現状維持で身体をならすことを目的としてプログラムに参加しているという状態である。

日常的なスポーツプログラムを始めとして、キャンプ・合宿・阿波踊りなどのイベント的なプログラムにもできる限り参加している。最初はファミリーの方が気に入りはまっていたが、今ではファミリー以上に SON 徳島を気に入り、積極的に参加している。

①レジャーへの理解：ルールへの理解は比較的早い方なので、SON 徳島で 8 回活動を行うと基本的なルールは理解しているようである。活動を通してスポーツルールの知識は大幅に増えたと思う。

レジャー活動の計画に関しては、やはり母親が中心となって動いている。しかし、実際レジャー活動の場に行くと、その場やその活動を積極的に楽しんでいる。SON 徳島は例外で、毎週の活動を日々待ち望んでいる。SON 徳島に行きたいという意思も明確に示す。現在は施設に通所しているのであるが、施設も好きなようだが、それ以上に SON 徳島が好きであるようだ。アスリートにとって、SON 徳島は生活の一部であり、SON 徳島を生活の中心として考えているようである。

②対人関係のスキル：コーチという存在に刺激を受けたのか、SON 徳島に参加するようになって積極的な面が多く見られるようになってきた。SON 徳島の中でも、普段の生活の中でも、自分を中心になって前へ前へとみんなを引っ張っていくようになった。集団の中で自己主張する機会も多くなった。こうした集団での行動に大きな変化が見られる。また、親がいなくてもコーチと一緒にどこへでも行くことができるようになった。このことから、アスリートにとってコーチの存在の大きさが分かる。

③レジャー活動のスキル：レジャー活動に大きな変化はないが、SON 徳島という活動の機会がアスリートの生活にとって大きな意味を持っている。SON 徳島の活動日を心待ちにし、毎日の生活を送っている。日々の生活に目的ができたようである。レジャー資源だけでなく、日常生活を送る上で大切な資源を身につけたように思う。

④レジャー資源：学校入学前；2歳から水泳教室に通う。4歳からYMCAの体操教室に参加。⇒小学校時代；水泳教室、小学5年からHDAのスポーツクラブに通う。小学5年からボーイスカウトに所属。⇒中学時代；水泳教室、HDA、ボーイスカウト。⇒高校時代；ボーイスカウト2年より阿波踊りのホルト連に所属。⇒現在；SON 徳島、ボーイスカウト、ホルト連

ルールの理解が比較的早いほうであるので、これまでに SON 徳島でやってきたスポーツに関しては基本的なルールは理解できているようである。こうしたスポーツの知識を得ることで、レジャーに関する個人的な資源を増やすことができる。また、コーチと出会ったことで日常生活に大きな変化が見られた。レジャー活動に関することではないが、アスリートにとってはプラスの方向への変化である。SON 徳島はコーチという重要な他者との関わりを提供してくれる場として、アスリートに上手く機能しているようである。

事例 A～G の面接調査結果から、SON 徳島に参加することによって変化した内容をレジャー教育の 4 要素ごとにまとめたものが表 2 である。

表 2. レジャー教育の 4 要素における SON 徳島参加前後の変化

<p>I. レジャーへの理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ レジャー活動（特に SON 徳島）への参加の意思を表すようになった。 ・ レジャー活動（特に SON 徳島）を何よりも楽しみにするようになった。 ・ 運動への価値の転換 訓練の延長→遊び・楽しみ 	<p>II. 対人関係のスキル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 積極になった。明るくなった。 ・ 人に話しかけていくことが増えた。 ・ みんなを引っ張っていくような存在になった。 ・ 学校で発表することが多くなった。 ・ 自己主張する機会が増えた。 ・ 自立心が芽生えてきた。 ・ 自分一人で行ける、自分一人で行いたいという主張をするようになった。 ・ 親がいなくてもコーチと一緒にどこへでも行けるようになった。 ・ 自分に自信がついた。
<p>IV. レジャー資源</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ レジャー活動と一緒にいる仲間が増えた。 ・ レジャー活動の機会が増えた。 ・ 新しいスポーツ種目を知った。 ・ 身体的に発達し、できることが多くなった。 	<p>III. レジャー活動のスキル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ レジャー活動の幅が広がった。 ・ 自分にもできるということを知った。 ・ できるようになる楽しさ、面白さを知った。 ・ レジャー活動の楽しさを知った。

SON 徳島に参加することで社会的価値をもっとも獲得したものは、新たなスポーツ活動ユニットによる対人関係のスキル（コミュニケーションスキル）、すなわちコーチやボランティアとの人間関係であることが明らかとなった。アスリートは SON 徳島の活動を他のどのような活動よりも楽しみにしていて、生活の中で重要な位置を占めるようになったことから分かるように、そこでの変化は、他の生活態度や言動における自発性や主体性に影響を及ぼしていることが示された。例えば、集団の中で積極性が出てきた、みんなを引っ張っていくようになった（事例 D.E.G）、親からの自立心が芽生え、何でも自分一人できるようになった（事例 A.E.G）など、日常生活の対人関係に関しての変化が顕著に表れている。その要因としてはコーチやボランティアとのかかわり方に大きな原因がある。コーチやボランティアは、アスリートに対して自然で気さくにアスリートを受け入れ、横並びの関係を築くことに努力を払っている。アスリートにとってのコーチやボランティアは、憧れの人であり、目標となるほど重要な他者となっている。

レジャーへの理解においてもアスリートの自発的行動が頻繁に見られる点が指摘された。養護学校や他の福祉団体における活動では少ないのだが、SON 徳島においては、積極的に自分の方から意思表示を様々な形でコーチやボランティアに働きかけている。訓練やトレーニングとして行ってきた運動（exercise）には少なかった、レジャーとしてのスポーツの面白さ（fun）を理解する機会となっている。自分の持てるレジャー活動のスキルが広がり、仲間も増え、その中で感情交流が生じ、そこから自分に対して自信が生まれてきたという背景があると考えられる。

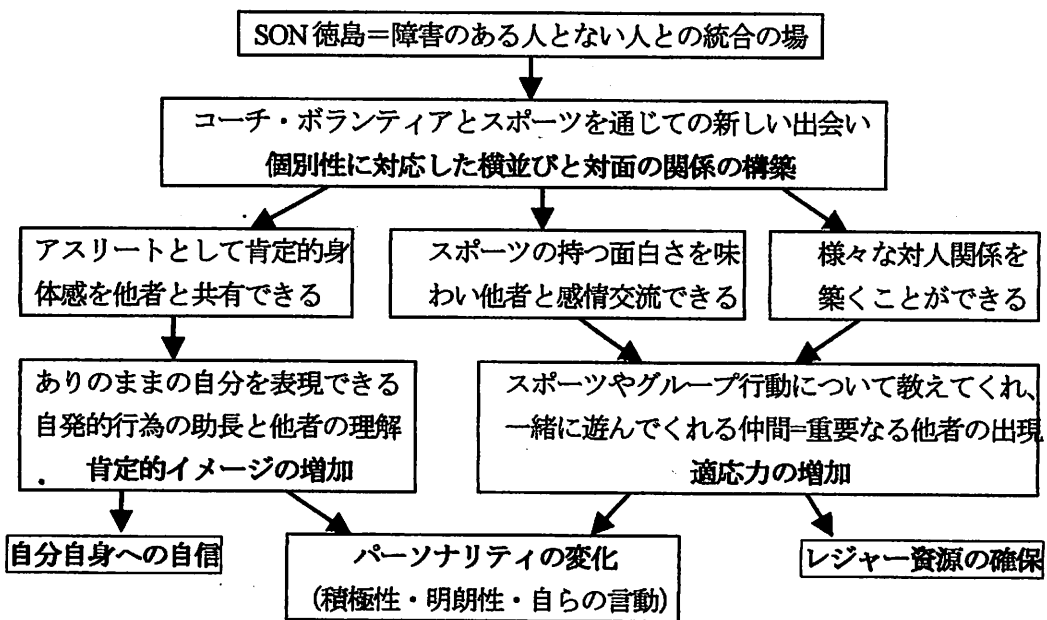


図 2. K J 法によるアスリートの SON 徳島参加後の変化についての要因分析

2) 観察参与調査フィールドノーツの解釈による活動分析

フィールドノーツ抜粋

2000.1.23 (日) B&G 体育館 サッカー3回目 14:00-16:00

「・・・入り口でCちゃんと会う。こんにちはと声をかけたら両手を取られてロボットのように引き込まれた。彼とはこのような接触の仕方ははじめてであり戸惑った。「このおじさんがするんで」と私の両手をAママにたたくように持っていく。「おいおい」と笑いながら応じた。手を離れたあとはそのまま逃げ去る。

フロアーの端に座って準備をはじめて全体を見渡すと、Kコーチがゴールキーパーしながら2、3人のアスリートと子どもを相手にシュートごっこをしている。テニスをするTコーチもいる。Yくん(自閉症児)が真中で小声で何か言っている。「こんにちは」といったけれど応答なし。Kさんはボールを追いかけてパスごっこをしている。いつも以上にそれぞれ思い思いで遊びまわっている。いつもプログラム開始までは20分ぐらいはこの状態である。コート端ではコーチたちがプログラムの準備をするが、ファミリーのBママと挨拶をする。ほかの人たちはどこにいるのだろうか。今年度中ごろから新しく加入したファミリーのママさんがかなり積極的になってきたように感じた。

ボールでウォーミングアップをしていたら、Sさんがきた。彼とは卓球以来の会話ができた。大人しいので、こちらから声をかけボールをけり出してやるとけり返してくれる。あまり会話がながい、卓球でよくベアになったせい、不安はない。自然とパスゲームの様に発展した。できるだけ丁寧なボールをけりやすいスピードで返すように心がけた。これは、Sさんの右足が不自由であるためだ。そのうちワンタッチでけり返すようになった。卓球(彼は卓球が上手、養護学校で卓球をかなりしていたらしい)でのテクニックを見ているので、ボールに対する反応やボールタッチはいいものがある。しかし、今回のサッカーでは足の不自由さが運動障害となっていた。足首があまり動かないせい、かちよつとでもボールの中心を捕らえられなければ、思ったところには蹴れない。しかし、スピードをできるだけ殺してパスするとねらいどおりに蹴り返すことができるようになった。そこで、私は両足を開いてゴールをつくってそこを狙わせるように設定した。単調なパスから少しゲーム性を付け加えたのだ。Sさんはより真剣にボールをけり返すようになっていく。股下を通過したボールに対して、私は後ろへ体を倒しながら両手でボールをキャッチするゴールキーパーの練習を行った。私もちょっと緊張。でも気づいてみたら、Sさんは私がキャッチするのをみてにこやかに笑っている。よかったと素直に思った。

Oコーチの支持で活動がはじまった。輪になって挨拶、準備運動である。かなり多くアスリート・ボランティア・ファミリー・コーチ40名程度であった。それでもファミリーの見学者だけでも10名程度はいる。準備運動にはTくんが率先して前に立った。Iちゃんが喜んで続いた。そうしたら、Cちゃん、Yくんとクラス年長者がまえにあつまってラジオ体操を行った。準備運動が終わり、シュート練習になった。シュートの仕方をOコーチが教示する。アスリートとボランティアがベアになって、サイドからのパスされたボールを直接シュートする練習に入った。私はまたSさんと一緒にいった。あまり声をかけられなかったが、蹴るタイミングと軸足をボールに寄せることを指示した。突然、私に近寄ってきて手を握るあいちゃん、手を握り返してナイスシュートと声をかけた。そのうち、シュートが打てたら手をハイタッチすることで称えるようになった。ベアでSさんについていたが、そのうち離れ、みんなが1列になるようにシュートしたあとのアスリートを導いていく役に徹した。眺めながら声かけ・・・」

解釈：プログラムはコーチが主導で進められる。そのためアスリートにとって学ばなければならないことが存在する。しかし、プログラム開始前の空間は、プログラムのために準備された条件（時間、場所、用具、仲間、個人的技能、ルールの知識）を資源にして、自由に活動することが認められた遊びの場である。ここに揃えられた資源を最適破壊しながら再構成し、遊びを創造し体感している。K コーチのサッカーゴール遊びや、T コーチのテニスもひとつのスポーツ遊びを提供しともに活動してくれる重要な他者として存在している。

レジャーへの理解としては遊びの中で今まで習得した技能や知識を試してみる重要な空間を形成している。ルールや技術が学ばれた資源として表出される。自らができる身体を体感している。この関係からスポーツ遊びそのものがコミュニケーションツールとなり、活動における肯定的身体感をからだで覚えることができるのである。

すべての活動においてアスリートは、コーチまたはボランティアによってペアあるいはグループに組まれて活動する。ペアだったりグループだったり、ここでスポーツ活動を通して対人関係スキルを身につけることになる。またそれは同時にボールを通じて動く身体を共有できる楽しさを、ボールによる表現のおもしろさを体感することができるように準備されているのである。

サッカーボールという媒体を通してのコミュニケーションは身体観の拡張を促す。それが感情的な共有により両者に共通のチャンネルが生じ、アスリートは徐々に他者に対して心を開くようになり、対面での交流が可能となってくる。時間はかかるが、コーチやボランティアといった障害のない人と対面関係を築くことができることで、そこからさまざまな刺激を受け、また自分自身にも大きな自信となってくると考えられる。こうした対面での交流は、やりとり機能の中でも基本的な部分であり、これを基本として質問や応答、そして要求といった高次の対面関係へと発展していくのである。このように活動の場の中で他者と関係を深めるスキルを学び、社会性を向上させていくと考えられる。

また、アスリートとコーチ・ボランティアがペアを組み、様々な活動を共同注視する機会も多い。同じ目線で同じ活動を見つめながら交わすコミュニケーションは、言葉だけでなく、身体表現や笑いなどによる非言語コミュニケーションによって仲間意識も高まる。これは単に場を共有しているだけではなく、お互いがお互いの活動を意識しあって同じ活動しているという実感をもつこととなる。このような他者との関わり合いは感情交流とも言われている。

SON 徳島の場合、アスリートとコーチまたはボランティアとの間にある共同注視関係や対面関係がスポーツ活動の基本ユニットになっている。こうした場での体験、認知、意味づけが、アスリートにとって大きなスポーツに対する動機づけとなっている。また、この共同注視関係や対面関係によって「共にある (being with)」という意識が、二人のコミュニケーション基盤をより強固なものにし、参加者のレジャー資源の獲得、レジャー活動スキルの獲得、レジャーへの理解を高める手助けとなっている。このようにコーチやボランティアとの間に重要な他者との関係性が生まれたことで、レジャー活動の場での変化だけでなく、日常生活での活動や態度変容に影響を及ぼすに至ったと考えられる。

また、プログラム構成はアスリートが自信を持てるように設定されている。記録を第一に

考え記録の良い人を評価するというのではなく、個人個人の体力や運動能力に合わせ、たとえ記録が上がらなくてもその頑張りを大きく評価するという体制をとっている。こうした体制により賞賛される機会が増え、自分の新しい面を発見でき、自分にもできるという自信が生まれてくる。このペアとなったコーチやボランティアからの賞賛による自信がアスリートの日常生活の態度変容に大きく影響しているようである。

このスポーツ活動ユニットとした対人関係の展開は、参加者の適応力やイメージの増進を促す原動力であると位置づけられる。Wolfensbergerによると適応力は、サービスを受けている人の適応力のニーズにサービスを関連づける方法と、サービスがそれぞれのニーズを強力的に有効に処理する力＝効能を持たせる方法で高めることができると指摘している¹⁾。スペシャルオリンピックス活動において、アスリートのニーズは特定しにくいし共通化しにくい。そのため実際にはコーチが計画した指導のもとで活動環境が整理され、できるだけ自分で選択して活動できるように構成されている。スペシャルオリンピックスの活動の場合、そのサービスが、参加するアスリートの環境や、グループによる人間関係の開発、そのスポーツ活動、その他の社会活動要素全てを構成することができる。そのため、参加者はアスリートという社会的役割を遂行する中で社会的価値を高めていくことができるのである。

4. 論 議

多くの障害者施策の中で、スポーツ、レクリエーション、文化活動などレジャー活動に関するものはライフスキルに関わる重要な領域であることを認識しなければならない。一般の社会では、障害のある人が仕事に就き給料をもらうことは確かに、その人のイメージを社会的に認めさせることに大きく関わることである。しかしながら、無償の仕事やスポーツやレクリエーションを含む文化活動に関わることで社会的に高い地位を得ることもできる。価値を引き下げられた人にとって、その低められたアイデンティティに結びつけられたものから解放され、肯定的な社会的価値をもつ役割に導かれる支援が重要なのである。その意味でスポーツは多くの効能を有した文化であると言えるだろう。特にレジャー教育機能を持つスポーツサービスの場合、そのスポーツ支援活動は、参加者にとって有効な福祉となる。社会的に価値を引き下げられた知的障害のある人にとって、これらの機会は自らの生活態度や日常行動を変えていく力にも転化することができるのである。その基準としてSRV理論は有効な評価基準になることが確認された。事例として取り上げたSON徳島の活動も、参加者に大きな影響を及ぼしていることが明らかとなった。また、アスリートとボランティアを障害者スポーツ活動の基本ユニットとして考えていく有効性も示された。SON徳島の場合、そのユニット活動が、参加者の肯定的イメージや適応力を増幅させ社会的価値を高める原動力になっていることが明らかとなった。

しかし、SON徳島でも地域スポーツの持つ問題と同じような問題が見受けられた。それは組織の閉鎖性の問題である。今現在プログラムに参加しているアスリートは、比較的初期から参加している人たちが中心である。SON徳島での活動プログラムを楽しみにしているアスリートも多いが、それ以上にコーチに会うためにSON徳島の活動に参加するというアスリー

トが多く見られる。今のコーチがいなくなれば SON 徳島にも参加しなくなるだろうというアスリートも少なくない。こうした理由から、その他のレジャー活動に広がりを見せないという問題点が浮かび上がってきている。アスリート自身の変化には、コーチとの出会いが大きく影響していることは確かである。重要な他者であるコーチに依存することは、当然のことではあるが、これが過度になってしまうとレジャー活動の内容にも人間関係にも広がりが見られなくなり、それと同時にコーチ個人への負担も大きくなる。

またコーチへの依存度が高く、先に SON 徳島に参加しているアスリートがコーチを独占し、新しいアスリートが入りづらい空間となってしまう。コーチとの関わりから、アスリートに大きな変化がもたらされていることも確かであるため、それがいけないこととは一概には言いにくい。しかし、あまりにもつながりが深くなってしまうと、人の入れ替わりが少なく、SON 徳島の組織自体がマンネリの状態となってしまう。プログラム中とそれ以外の時との境が曖昧なものとなって、初めての参加者には楽しみづらいものとなっていると感じられる部分もある。そこにはコーチやボランティアスタッフの人的資源不足が見受けられる。アスリートの自立、そしてノーマライゼーションのきっかけとして SON 徳島を機能させるためにも、コーチ・ボランティアとアスリートがお互いに学びあうことのできる場として発展させていくべきである。また、アスリートが中心となっていく形式のプログラム、いわゆる「本人活動」³⁾ もあって良いはずである。アスリートが中心となっていく SON 徳島を展開させることで、社会的にもより一層大きな意味を成すと思われる。このように表裏一体の関係にある「支援の個別化」と「ネットワークの形成」を、障害のある人の住む地域においてどのように実現していくのかという大きな課題が浮かび上がるのである¹⁾。

これら SON 徳島の現実問題を解決しようとする場合、やはり SRV 理論は有効な方向性を示してくれるであろう。これらの問題に対して絶えず利用者のアスリートの側から考え、プログラムやサービス内容を改善していくことが期待される。ボランティアの手で育まれてきた新たな地域のスポーツ文化が、少しでもこの理想のサービスになるように努力することは、トップダウン方式によって発展してきた地域スポーツの偏った社会的価値を是正し、地域のスポーツ文化の概念を転換させる契機となるはずである。そして地域スポーツとしての文化的質を高めること、すなわち、地域スポーツとして知的障害のある人に適正なスポーツ支援が提供されるような支援体制を整備することが重要な課題である。

ノーマライゼーションが叫ばれるようになって久しいが、日本には障害のある人に対する偏見がまだまだ強く残っているのが現状である。SON 徳島のように地域に開かれたスポーツ支援活動が、他の地域スポーツ団体や組織に影響を及ぼし、結果的には、この活動が知的障害のある人と障害のない人との架け橋となり、新たな地域スポーツのノーマライゼーション運動として広がっていくことが強く望まれる。

5. 引用参考文献

- 1) 伊藤則博 (1999) 「地域でいきる」ことを支援する、教育と医学、47 (12)、pp2-3
- 2) 堀正嗣 (1998) 「障害児教育のパラダイム転換 統合教育への理論研究」 明石書店

- 3) 松本了 (1998) これからの障害者観—本人中心主義、教育と医学、16 (12) pp.4-11
- 4) 松田恵示 (2001) 「交叉する身体と遊び—あいまいさの文化社会学」世界思想社
- 5) Osburn, J. (1998). An Overview of Social Role Valorization Theory. The International Social Role Valorization Journal, 3(1), 7-12
- 6) Peterson, C. A. & Gunn, S. L.(1984) Therapeutic Recreation Program Design: Principles and Procedures, Prentice Hall Inc.(ピーターソン・ガン (1996) 師岡他訳「障害者・高齢者のレクリエーション活動」学苑社)
- 7) 佐藤充宏 (1999) 障害者スポーツを共有する身体の風景、徳島大学総合科学部人間科学研究、7、pp.67-78
- 8) 佐藤充宏 (1998) 車椅子生活者における「障害者スポーツ」と「生涯スポーツ」、徳島大学総合科学部人間科学研究、6、pp.43-61
- 9) 芝田徳造 (1992) 「障害者とスポーツ—スポーツの大衆化とノーマリゼーション」文理閣
- 10) 鈴木秀雄 (1996) 「セラピューティック・レクリエーション」不昧堂
- 11) VanDer Gugten, G. W.(1997) Sport as a Tool in Rehabilitating Person with Physical Disabilities, ICHPER・SD 33(4), pp50-56
- 12) Wolfensberger, W. (1994) A Brief Introduction to Social Role Valorization: a High-Order Concept for Addressing the Plight of Societally Devalued People, & for Structuring Human Services.(W.ウルフェンスパーガー (1995) 富安芳和訳「ソーシャルロールパロリゼーション入門」学苑社)
- 13) Wolfensberger, W. (1981) The Principle of Normalization in Human Services, National Institute on Mental Retardatin (ヴォルフエンズベルガー (1996) 中國康夫他訳「ノーマリゼーション—社会福祉サービスの本質—」学苑社)
- 14) やまだようこ (1998) 身のことばとしての指さし、秦野悦子他編著「コミュニケーションという謎」ミネルヴァ書房
- 15) 米山岳廣 (1998) 「知的障害者の文化活動—社会活動を促進するひとつの方法、文化書房博文堂
- 16) 芳賀健治 (1998) 日本の医療・福祉の現場で実践されるレクリエーションのアセスメントと評価の視点に関する研究：日本の実態に合わせたアセスメントと評価の模索、レジャー・レクリエーション研究第28回大会発表論文集